

高い国際理解とは何か ベルギーで考える

開倫塾
塾長 林 明夫

Q：ベルギーには何をするために行ったのですか。

A：(林。以下略)失業の少ないヨーロッパをどのようにしてつくったらよいかについて考える国際会議に参加するためです。(ベルギーの首都でもある美しい歴史の都ブリュッセルには、三両連結の黄色の路面電車(トラム)が走っていました。)

Q：日本人なのに、何故ヨーロッパの会議に参加するのですか。

A：ヨーロッパの国々は長い間、働きたくても働けない、つまり「失業」の問題に苦しみ抜きました。5年前にポルトガルのリスボンで話し合いを持ち、10年かけて、つまり2010年までに失業率を4%くらいにまで下げ、仕事に就ける人を増やそうと決議しました。2005年の今年、その中間に当たりますので、3月にEUの代表による見直しの会議が行われました。私が参加した会議は、具体的にどうしたらよいのかを話し合うものでした。

何故日本人である私が参加したのか。(実際、約1000名の参加者の中で、日本から、いやアジアからの参加は私1人でした。)日本もまだまだ経済の成長が以前ほどには戻らず、長い不況が続いています。物の値段が少しずつ下がり続ける「デフレ」からなかなか抜け出せないでいるのです。若い人や女性、年配の方、障害をお持ちの方の中には、仕事に就きたくても働けない方が多いのも事実のようです。

そこで、長い間失業問題に苦しんだ結果、地続きで近いためか歴史的には争いの絶えることのなかったヨーロッパの国々がEUという形で一つにまとまり、通貨までも統合(ユーロ)して経済を良くしよう、そのことによって失業を少なくしようと取り組んでいることから、日本も学ぶことが多いのではないかと私は考えました。

ヨーロッパで最大の雇用についての会議であり、インターネットで申し込みば誰でも参加できるのに、日本人の参加は私一人であったのには驚きましたが、とても勉強になりました。

Q：どんなことが話し合われたのですか。

A：失業を少なくして雇用を安定させるには、ヨーロッパ全体としても、また各国としても、さらには地方自治体としても、最終的には仕事を生み出す企業としても、もっと言えば一人ひとりとしても、各々が知識社会に対応できる「力」をつけなければならない。国や自治体、企業は「競争力」をつけて、他の国や地域、会社に負けないようにしなければならない。働く人の一人ひと

りは、勉強をし続けて知識社会に合った仕事ができるようにならなければならない。「人の移動」も自由にしたい。

ただし、仕事をする機会(チャンス)は、働きたいと希望する人すべてに「平等」に与えられなければならない。特に、女性、年配の人、外国から来た人、障害を持つ人には丁寧な方法で(人間としての尊厳を大切にすやり方で)仕事を与えられなければならない。

政府と大学や研究機関と企業が力を合わせて、その地域の良さをさらに伸ばすような形で「クラスター(ぶどうの房のように産業が集まった地域)」をつくることも大切。新しく仕事を始める人や社会的な仕事をする人を励まし、育てることも大切。外国の企業と一緒に仕事をすることも大切。

みんなの「力」を合わせる、力の方向を一つにする、ベクトルを合わせることで経済を成長させ、仕事をしたい人には仕事ができるようにしよう。

大方、このようなことが話し合われました。

Q：最後に一言どうぞ。

A：働く人の「ダイバーシティ(多様性)」を大切に、「働く機会(チャンス)」を平等(イコーリティ)にもてるヨーロッパをつくろうとも強調されました。「国際理解」の前提は、自分以外の他人と自分との違いを事実として認めることですので、私も納得しました。

仕事に関して一生かけて勉強し続けること(ライフ・ロング・ラーニング)の大切さも会議の間中話し合われました。

フィンランドでも多くのことを勉強しましたが、ヨーロッパから学ぶことは多いなあと心から思います。塾生の皆様も、働くこととは何か、どのように働きたいのかを少し考えてみて下さい。

- 2005年4月14日ブリュッセルにて記す -

ベルギーでは、ブリュッセルで開かれたEU(欧州委員会)主催のEmployment Week2005に参加致しました。会議の内容は、www.employmentweek.com.で公表の予定です。